知的障害者の働く場づくりをめざして、30年

―株式会社ダックス四国―

職場ルポ

WORKSHOP REPORT

（文）清原れい子　（写真）小山博孝

株式会社ダックス四国
〒783-0046　高知県南国市岡豊町江村 11
TEL 088－878－2311　FAX 088－878－2312

学生時代に「知的障害者」と出会い、知的障害者の働く場づくりにこだわり続けた人がいる。株式会社エフピコの特例子会社、重度障害者多数雇用事業所「株式会社ダックス四国」社長の且田久雄さん。その思いが実現するまでに三十年の年月が流れた。

知的障害者の施設づくりから、会社設立へ

和歌山県出身の且田さんは、明治学院大学社会学部の学生になってまもなく、福祉の世界でユニークな活動をした人に贈られる「山本賞」で知られる故山本普（ひろし）先生から、夏休みに土佐市にある「光の村」の建設を手伝ってくるようにと送り出された。

「障害者のシの字も知らなかったのですが、ちょうど高知に友達がいましたので遊びがてらに行ってやろうと。行ってみたら、園長に知的障害の小中学生を二〇人連れて、校舎や寮舎をつくるための土地を開拓してこいと言われました。葦が一面に生えている沼地で二〇日間、トイレの穴を掘り、ドラム缶でお風呂をわかし、軍隊用の蚊帳で寝起きをしました。その間に、知的障害の小中学生たちがおもしろいように変わっていくことを目のあたりにして、のめり込んだんです」

大学卒業後、研究室に残りたいという思いもあったが、「光の村に」と勧められて、職員として就職した。それ以来、更生施設、養護学校、通勤寮など、知的障害者のための総合的な施設づくりに力を注ぎ、菓子や箱折り、鉄工の工場などを立ち上げて、知的障害者の職業的自立を目標に作業学習を進めていった。

「生徒を実習させ就職させても、どんどん戻ってくるんです。また更生施設にいる大人の人たちを職業指導の名目で働かせても、職場が衣食住と一緒のところでは、働くという気持ちが生まれてこない。近くに工場をつくり、バスや自転車で通勤して、お小遣いが払えるようにしたいと計画しました」

だが、「学校教育の方法論を世に問いたい」という「光の村」創設者の西谷英雄さんと意見が合わず、退職を決意。自分で知的障害者の職場をつくろうと考えたのは、三二歳のときだった。

作業学習のため、福山パール紙工㈱（現㈱エフピコ）から折り箱の仕事をもらっていた縁で、仲間三人で一九八一年、福山パール紙工の包装資材などを販売する「株式会社モダンパック四国」を設立した。

且田久雄社長

「知的障害があっても、適切な指導と助言があれば、労働者として十分働けるという確信はありましたが、受け入れてくれる会社がなければ、何の意味もありません。

障害者の働く場をつくるためにはまず商売の勉強をしなければと会社を設立しました。今年二十一年目で、年商十数億円の企業に育ちましたが、販売会社ですから、知的障害者を雇用するのはむずかしかったんです」

モダンパック四国を設立したときから、「知的障害者が働く企業をつくりたい」という希望を福山パール紙工社長の小松安弘さんに伝えていた。十数年前、再びその話を出したとき、グループ内にはすでに知的障害者が働く企業ができていることを知った。

「その、千葉県習志野市にある株式会社ダックスを見学して、知的障害者の生き生きとした仕事ぶりに感動しました。社長の藤尾真子さんに、障害者の会社をつくりたいので協力してほしいと頼みました」

九三年にダックス四国設立準備室を開設し、実績を積まなければと九七年に高知市郊外に工場を借り、成型機一台を据えて、知的障害者五名と健常者一名で操業を開始した。九九年に重度障害者多数

雇用事業所の認可がおり、二億円の助成が決定。二〇〇〇年一月に現在の新工場が完成した。

現場の主役は知的障害者、成型マンは脇役

ダックス四国では、弁当や惣菜、刺身などの容器に使われる透明なプラスチックのフタをつくっている。工場内では大型の成型機が四台動く。

「生産過程を完全にリサイクルするため、製品はフタだけにしました。単一素材でないと、リサイクルラインが二ライン必要になりますからね。現場で作業についているのは、全員が障害者です。知的障害者がいないと、仕事は成り立ちません。彼らが主役で、成型マンは脇役です」

社員は二五名。そのうち知的障害者が一六名、聴覚障害者が一名。健常者は、現場を統率する二〇代の成型マン四名、「父母役」の年配の夫婦二名と、製品を運搬する運転手二名で、その構成には社長の考えが貫かれている。

「私と現場に携わる若い成型マンとの間に三〇～四〇代の転職者を入れると、下の者がやりにくい。私の考えもストレートに伝わらなくなります。彼らは私の話を海綿のように吸収してくれますが、若すぎるので、定年退職をした人を一人加えています」

新工場は、先に入社していた五名が核となり操業を始めたが、順調に立ち上がったわけではなかった。一台だった成型機が四台にふえ、人がふえ、製品の型もふえたため、その変化に知的障害者たちが追いついていけなかった。

一ケースのフタの数が、一枚足りなかったり一枚余計だったりして、クレームがきて、福山の本社に泊まり込みで一、八〇〇ケース全部を検品したこともあった。

そこで、フタの枚数が違うと自動的にはねるように、ベルトコンベアの間に〇・一グラムの差を判別できるオートチェッカーをセットした。金属探知器も導入した。

「障害があってもなくても、長時間仕事をするとミスが出てきます。ミスを起こさないように、お金で解決できるものはお金で解決しようと考えました。事故のないように、光センサーなどもふつうの工場の五倍ぐらいつけています」

その後、工場は順調に稼働して、予想より早く、操業二年目で黒字になった。

「私自身もそうですが、社員にも、障害者とか知的障害者という発想で論じないでほしいと言っています。会議などで『知的障害者』という言葉が出てくるのは仕方ありませんが、目の前にいる人たちは、〇〇さん、△△さんという『個人』として接しています」

工場の二階では、箸の袋詰め作業をしている。箸に袋をかぶせ、印刷まで自動でできる機械が五台。月に一〇〇万円程度の売り上げがあるという。ここで養護

弁当など各種パックの透明なフタの製造ラインが並ぶ

箸の袋詰め作業をする浜村美雪さん

学校や施設の職場実習を受け入れている。

定着はよく、欠勤もなし

九九年の合同就職説明会で、障害者をさらに一二名採用した。応募者は身体障害、内部障害を含めて六〇名。且田さんは全員を面接した。

「知的障害者は、本人の目の力を見ました。それと、同席してもらった親御さんの理解です。我が子の将来をどうしたいかを聞きました」

「聴覚障害者には接した経験がなかったので、雇うとき迷いました。手話を習わないといけないかと思いましたが、どうにか声が出て会話が成り立つので、ほとんど違和感はないですね。中途半端に手話をすると、彼の能力をつみとることになる。わからないことは筆談しています」

これまでの退職者は身体障害者のみ。車いすの女性が結婚退職し、きっちり六ヵ月で退職した聴覚障害者は、失業給付目当てだったことが後からわかった。

「母親役」として面倒をみているのは西森栄子さん。女子社員の生理のことまで把握している。

「それが定着の大きな要素ですね。段ボールを蹴ったとか、にらんだとか、仲間を責めるのが好きな人がいて、成型マンが相手にしないと、私のところに『話があります』と言いに来る。そういうときは、全員で話し合います。いろいろなことはありましたが、いまはみんな欠勤せずに働いています」

週休二日制だが、仕事が忙しく、二交代制をとる。通常は八時半から一七時半まで。一四時から二二時までの遅番は、仕事の終了後、成型マンが知的障害者を家の前まで送っていく。

給料は、諸手当も含めて少ない人で一三万五、〇〇〇円。四名が土佐市から通ってくる。会社のマイクロバスが六時過ぎに土佐市役所前を出て、途中何人かを乗せて、最寄りの土佐大津駅に立ち寄る。自転車の人、マイカーの人もいる。全員が八時前には揃い、八時から機械が動き始める。

１号機を担当する窪内正義さん（右）と仁井田忍さん（左）

松本直美さんが土佐市の自宅を出るのは毎朝六時過ぎ。就職して五年。仕事には慣れた。楽しみは買い物。友達に誕生日のプレゼントもした。

桑原崇さんも入社して五年。時にくじけそうになることもあるけれど、仕事はがんばっている。甘いものが大好き。カラオケや、高知駅前の喫茶店でおいしいケーキを食べるのが楽しみだ。

長野陽祐さんは新工場稼働と同時に就職した。クレームがありそうな製品があると不安になる。課長や先輩には「あまり心配するな」と言われる。取材の日は二二時までの遅番勤務。休日に街に出ると、家族にケーキを買うこともある。

１号機でできあがった製品をケース詰めする小笠原久美さん

武田信二さんは、車の運転免許をとり、マイカーで通勤している。休日には映画も見に行く。高校生のときに乙種第四類と丙種の危険物取扱者、二級ボイラー技士の資格をとった。リサイクルの工程を一人で担当している。

「正社員」として働くことの意味を考えてほしい

且田さんは、新工場が稼働してから一年間、親との懇談を月一回行い、親の「しつけ」もしてきた。

「正社員として雇用されるとはどういうことなのか。彼らは一人前で、親御さんたちと一緒なんですよ。親御さんは『障害者だからまぁいいわ』という気持ちがものすごくありますが、それは間違いだということから話します」

「私も親も先に死ぬんですよ。親御さんが二～三人集まれば、家が買えるでしょ。自分たちの給料で自分たちの世話をしてくれる人を雇えばいい。自分が死んだ後のサポートシステムをつくろうという話を、だんだんわかってくれるようになりましたね」

養護学校の先生方にも注文がある。

「学校の先生方は、実習に来ると指導してみよう、引っぱっていこうという発想が強いですね。でも、知的障害者にはできることとできないことがある。できることからさせて、見極めていくことはうちの若い者にまかせて、先生は見ていてほしい。できないものはできないとして認めることが必要です」

その代わり、就職するまでに身につけておいてほしいことはたくさんある。

2号機の担当は長野陽祐さん（右）と山本晴士さん（中）。ケース詰めは上甲泰弘さん（左）

まず食事の仕方。それと服装だ。

「テーブルにひじをつきながら食べるんですよ。食事のしつけをしっかりしてほしい」

「養護学校の実習生はほとんどジャージを着て来ますが、社会人として通勤するとき、どんな格好をするかを考えてほしい。先生方がジャージで来たら会社に入れません。背広とネクタイで来てくださいと言います」

服装がきちんとしていないと、親を呼び出す。

「通勤に短パンをはかせている。親は『この子らが差別されるので、私ら暮らすのがしんどい』と言うけれど、そのような格好を親が許している。安物を着せないで、いいものを着せなさい。それで釣り合うのだからと話します」

携帯電話で何万円も使う人もいる。親の文句に、且田さんは答える。

「お母さんに『自分で稼いだものは何に使おうがいいではないか』と言うと、そういう考え方もあるのかと納得します。働いたら、遊ぶ。お金を貯めるだけでは、日本の経済もよくならないでしょ。それは、㈱ダックスの藤尾さんと考え方が同じです」

新年会、お花見、忘年会などのほか、毎年近場の観光地に、二～三年に一回はデラックスな旅行を計画している。昨年の社員旅行は韓国へ行くはずだったが、

テロの影響で北海道に変えた。

知的障害の社員はほとんどが二〇代。働いたら遊びやおしゃれや携帯電話にお金を使うのはあたりまえのこと。ダックスやダックス四国の「同世代の若者と同じ」という考え方が、私は好きだ。

夢は、知的障害者を株主にすること

知的障害者五名と一緒に工場を立ち上げた成型マンの山崎誠人さんは、当時まだ一七歳だった。

「エフピコとの交渉も全部こなしたので大したものだと思いました。若い人たちだれにでもチャンスがあるように器づくりをしてきましたが、四人が同じライン に並んでいます。私の息子も特別扱いはしません。本人もそのつもりでいます」

社長の息子、且田恭介さんに話を聞いた。

「障害者たちと年齢が近いため、なかなか上司とみてくれないので、教えるのがむずかしいですね。注意をすると会社を辞めると言われたり……。ぼくらも上司とみられるように努力しなければと思っています。彼らは仲間意識が低いので、これからはコミュニケーションがとれるようにしていきたいですね」

ダックス四国の将来は、成型マン四名が担っている。

「仕事は、十年間は大丈夫だと思っています。二〇代の四人が成長して、四国の障害者雇用の核になってほしいですね」

高知県に知的障害者が働く一つの拠点ができた。且田さんは、そのネットワークを四国全体に広げたいと考えている。すでに、紙おしぼり、紙ナプキンなどを製造する「大黒工業」の特例子会社「大黒友愛紙工」が愛媛県に設立された。高知県にはスーパーマーケット「サニーマート」の特例子会社「エコライフ土佐」がリサイクル工場の操業を始めた。大黒工業はさらに、障害者と高齢者が働ける会社を香川県に、サニーマートも重度多数雇用事業所を計画中とか。

「うちで一生懸命に障害者を雇っても二〇名です。大黒工業とサニーマートを合わせても五〇名。四国各県に一つずつできたら、うちもやってみようかという企業が出てくるのではないかと思うんです」

知的障害者との出会いから三十年余。且田さんに、これだけ情熱を注がせるものは何なのだろう。

「うーん、なんやろね……。ロマンでしょうかね。だれもしてこなかったことをしたいというのがいちばんの原動力かもしれません……。経済的な自立がなければ、ノーマライゼーションはただのお題目です。最終目標は、知的障害者主体の会社がネットワークを組んで株式を上場すること。知的障害者を株主にしたいんです」

たくましく、着実に。且田さんの話を聞いていると、その夢が実現しそうに思えてきた。

ダンボールの組み立てなど、補助作業は手のあいているメンバーが交代で行う

製品の端切れなどはすべてリサイクルされる。担当するのは武田信二さん

4号機の担当は児島敦さん（右）と松本直美さん（左）